

野上 燿三 先生

橋本 淑夫 (物理)

野上先生は昭和24年3月に本学部物理学科を卒業された。このクラスは、終戦後最初の入学組で、戦争中に大学を出て軍隊に勤めた人で、もう一度自分

のやりたい学科に入りなおした人が多かった。野上先生もその一人で、昭和16年に工学部機械学科を出て、海軍技術研究所に勤めておられたが、同僚の物

理出身の人達のオリジナルな物の考え方に魅かれての二度目の大学生生活であったが、幼いお子さんをかかえての戦後のインフレ中の生活はなかなかつらかったそうである。

昭和33年に助教授になられ、嵯峨根先生、百田先生のあとをついで、戦前から生き残りのバンデグラフ加速器による原子核実験研究を進めて来られたが、昭和34年に、原子力の研究と教育に関する学部間協力構想に基づいた、原子力協力構座である核反応物理学講座に移られ、当時新設された工学部原子力工学科の教育に協力されると共に、昭和36年から学内共同利用設備の一つであるタンデム加速器の建設に当られ、国産第一号機としての困難さに加え、いわば理想論である学部間協力構想が、諸方面の十分な理解を必ずしも得られていなかったという情勢の中で、諸種の苦勞をされながらこれを完成された。更に、タンデムを含めた原子力共用設備が、特定の学部学科から過大な影響を受けずに、真の学内共同利用を行えるようにと、原子力研究総合センターの実現に尽力され、昭和42年同センターの発足と共に、初代センター長になられた。また最近、同センターが窓口になっている全国の大学のための原研共同利用の運営委員会委員長をつとめられている。

筆者は、昭和33年暮から先生の助手として本学部に勤めるようになって以来ずっと今日まで先生と共に過して来たのであるが、先生は大変温厚なお人柄

で、常に若い研究者たちを育てるには、その人達の自由な発想を伸ばすのが一番だと考えられ、新しい研究テーマについての相談を受けると、いつも肯定的に受止められ、可能なかぎりその実現のための条件を調べてやるように努められた。このような雰囲気の中で過した弟子には、現在全国にわたり中堅の研究者として活躍している者が多くいる。

先生は技官層にも分け隔てなく接して来られた。殊に原子力センター発足当初のセンター長時代には、センター設立の主旨であるセンターの独立に力を注がれたが、その結果センターの主要人員構成を占めることになった技官の実力を伸ばすために、自主的な自己研修の方式を作るなどの努力をされた。職員組合に対しても古くから理解を示されており、そのせいで、学内紛争の際には、東職に対する交渉委員に引張り出されて紛争解決の努力をされたりした。

先生も昔は健脚家で、毎年の研究室の遠足の山登りにも先頭をきって歩かれたものであるが、タンデム加速器建設の苦勞のためか髪が白くなり、近年はそれも薄くなられ、お孫さん二人を持つにふさわしい好々爺の風貌をされている。四月からは明星大学で教育研究に携わられるが、同大学では大学院設置の計画があり、もう一度新組織作りに尽力されることになる。先生の御健康と御活躍を祈って筆を置くことにする。